

## 江淹の「赤虹賦」について

福井佳夫

### 一 「赤虹賦」訳文

元徽三年（四七五）の初夏、江淹（こうえん四四四～五〇五）は九石山にあそんだ。建安郡呉興県（いまの福建省浦城）の治所から、西南へ四十里ほどのところにある山だ。江淹はこのとき三十二歳。前年の秋、南徐州刺史の建平王劉景素によって、京口から辺地の呉興に左遷させられたばかりで、おもしろからぬ日々をすごしていた。そこで、その鬱屈をはらそうと、九石山のふもとを舟行したのだった。

ところが、そこで江淹はめずらしい現象にぶつかった。とつぜん、眼前に赤虹が出現したのである。赤虹があらわれ、かがやき、そしてきえてゆくさまを、彼は目のあたりに実見

した。そして、その現象にひどく感動し、その感動をそのまま賦にしたたのである。それが「赤虹賦」と題されて、現在までつたわっている。

本稿は、この江淹「赤虹賦」をとりあげる。そして、賦の内容を解説してゆきながら、その主題や意義をかんがえてみたいとおもう。

論を展開する前提として、まず「赤虹賦」の全訳を提示しておこう。

この「赤虹賦」、たいへん難解な作であり、自力ではとてもよめそうにない。たださいわいなことに、近時、兪紹初・張亜新『江淹集校注』（中州古籍出版社 一九九四）や羅立乾・李開金『新訳江淹集』（三民書局 二〇一七）、丁福林・楊勝朋『江文通集校注』（上海古籍出版社 二〇一七）など

の訳注書が上梓され、多少はよみやすくなってきた。

だがそうであっても、この賦が難解であるのはかわらない。これらの訳注書（羅・李の書は中国語訳も附す）にたすけられ、なんとか日本語にうつしてみたが、これでよかったのか、はなはだこころもとない。そうした代物ではあるが、とりあえずの訳文をしめしてみよう。つぎのようである（内容によって分段し、各段に小見出しもつけておいた。ただ換韻と分段とは、かならずしも一致させなかった）。

序

東南（呉興）の連峰のむこうに、九石山という山がある。この山は、あかい絶壁が千里にそびえ、あおい断崖が百仞もきりたっている。流水ちかくの苔こけはすべりやすく、谷川にそつた巖石はけわしい。藜草をさがしにきた巫咸が、天地を上下する神々でなければ、こんな山にはのぼらないだろう。

さて夏の蓮がさきだし、春の蓀草がまだかれぬころ、私は岸边で小舟にのり、ゆるゆると川沿いをすすんでいた。「雨がやんで」巖だらけの崖に陽光がさし、雨雲があかるんできたちょうどそのとき、とつぜん虹が出現し

てかがやきだし、おぼろな光が川波をてらしたのである。その虹は山頂から川のはとりまで、湾曲しながらかっている。私は虹にちかづいて、じっくり観察してみた。この虹、雨と日による陰陽の気が作用したもので、じつに見物といふべきものだった。

このとき私は、以前「泰始六年 四七〇 に建平王さまにしたがつて湘州へゆく途上で」香爐峰にのぼって、手づから白雲にさわつたことをおもいだした。いまは、九石山のふもとにきて、あかい虹を観察できている。白雲と赤虹の二物に遭遇できるとは、えがたい奇縁ではないか。私はこの奇縁に感じて、賦をつくつてみたのである。

東南嶠外、爰有九石之山。乃紅壁千里、

青萼百仞、

苔滑臨水、自非巫咸採藜、皆斂意焉。

石險滯溪。群帝上下者、

於時夏蓮始舒、肅舸波渚、緩曳汀潭。

春蓀未歇、

正逢「巖崖相焔、俄而雄虹赫然、暈光耀水。

「雨雲爛色。

「僊臺山頂、僕迫而察之、実雨日陰陽之氣、信可觀也。

「鳥奕江湄。

又憶昔登爐峰上、手接白雲。今行九石下、親弄絳蛻。

二奇難並、感而作賦。

神仙さがし

九石の峰々はうねうねとし、またでこぼこしていて、原始そのままの連山だ。ここには鯛や鱒があり、虎や豹がいて、さらに大蛇までとびだしてくる。初夏のいまは水蒸気がもうもつとし、緑葉が蓮の花をささえている。この私、なげいたとて気分はくつろがない、せめて日々の憂いをはらしたいとおもつ。

現世には神仙がいなくなつたので、ここの山中でその足跡をみつきたいもの。彼らは高峰で仙草をとつたり、崩石の隙間から神丹をみつつけようとしていたり、してはいるのだろうか。でもみえるのは、ただ鱸の洞穴から水がながれで、竜の橋のしたで石が縦横につみかさなっているのだけ。

曰、邈迤碣磧兮、太極之連山。

鯛鱒虎豹兮、玉虺騰軒。孟夏菌蓋兮、荷葉承蓮。

悵何意之容与兮、冀暫緩此憂年。

「失世上之異人、

掇仙草於危峰、

視鱸岫之吐翕、

遲山中之靈跡。

鑄神丹於崩石。

看龍梁之交積。

虹の出現

そこうつしているうちに、紫雲が天空にのぼってゆき、赤霧が天空からおりてきた。「雨がふつており」白日はかくれて、碧雲が天のなかばまで渦まいている。やがてなごりの雨もまれとなり、陽光があでやかにかがやきだした。川の流れば金色の波浪のよう、岩石は玉の岸辺にそっくりだ。山々は亀甲の鱗文のようにかさなり、流水は蛟の色のようにひろがっている。そうしたところへ不意に赤虹がとっせん出現し、うねうねと上下にのびていった。朦朧としたまま変化してゆき、ぼんやりとして一定でない。虚にあらす実にもあらず、またきえたりひかたりしている。

さらに赤虹は、山頂をあかくてらしたかとおもつと、川波までかがやかす。この赤虹、図讖や緯書に記載され

てはいるが、ずっと知識だけで実見したことはなかった。賛嘆してあちこちあるき、周遊しながらじっくりながめた。そして私は想像したのである。南方の番禺ばんふの広野、さらに丹山の高峰、そして傳説ふえつが星にまたがり、夏の啓が両龍にのつて天空をまう姿を。

於是「紫油上河、

白日無余、

絳氛下漢、

碧雲卷半。

残雨蕭索、

水学金波、

光煙艷爛、

石似瓊岸、

錯龜鱗之峻峻、

俄而赤蛻電出、

蝸虬神驤、

曖昧以變、

非虛非実、

艷赫山頂、

雖凶緯之有載、

曠世識而未逢。

炤燎水陽、

既咨嗟而躑躅、

想番禺之広野、

騎傳説之一星、

聊周流而從容、

意丹山之喬峰、

乘夏后之兩龍。

虹の消滅

この赤虹、いくばくもなく姿をけしたが、火がきえても山に赤みがのこるごとく、虹のなごりが目につつり、残照がただよっている。そして、なお鬱蒼たる草あたり

でかがやき、青々とした樹のなかで余光が映している。やがてあかい渚の青苔をくらくし、石路の朱草をぼんやりさせてゆく。霞はあかいまま下方へおりてき、陽ざしは衰微しつつ「反射して」上へのぼっていった。

彼靈物其詎幾、象火滅於山紅、

余形可覽、

曜威蕤而在草、

殘色未去、

映青蔥而結樹。

昏青苔於丹渚、

霞晃朗而下飛、

曖朱草於石路、

日通籠而上度。

仙境への憧憬

わが人生はゆきづまり、時世もうつろいがちなのがかなし。ただ、安期生はきちんと赤鳥をのこしてくれているし、黄帝が鼎湖で登仙したこともしたわしい。ついでは私も、朱鬢しゅくぱん白霧はくきの車にのつた神仙となり、方瞳ほうとうや一角の仙人となりたいものだ。

彼らがすむ高樓は北荒のはてにあり、おなじく弁山は西海の浜にあるという。さらには、流沙の野や析木の津の「神仙たちの居住」地では、雲は奇妙な色を呈し、煙霞もふしぎな魚鱗のようだろう。またそこには、虹霓の

靈氣や陰陽の神秘もまじっているに相違ない。

俯形命之窟局、

定赤鳥之易遭、

哀時俗之不固、

乃鼎湖之可慕、

既以為

朱髻白髷之駕、

帝台北荒之際、

方瞳一角之人、

弇山西海之浜。

流沙之野、

雲或怪彩、必雜

虹霓之氣、

析木之津、

煙或異鱗。

陰陽之神焉。

## 一一 一時的な関心

この「赤虹賦」、序文によると、江淹はあるとき、呉興にある九石山にあそび、そのふもとを舟行した。すると、とつぜん赤虹が、山頂から下方の川岸にかかるのをみたのである。彼は、その虹のあざやかさに感動し、その感動さめやらぬうちに、この賦をつくった——ということらしい。

賦の本文にはいるや、江淹は、神仙の足跡をみつけようとして、この山へやってきたという（一）。だが、そうした江淹の眼前に、とつぜんあかい虹が出現したのである。その赤虹、しばらく鮮明な様態をしめしていたが（一）、やがて消

滅していったのだった（一）。

この赤虹の出没の場面、大仰かつ神秘的な描写がおおい。また一部に難解な叙景が散見し、いまひとつ具体的な情景やイメージがわきにくい。「紫雲が天空にのぼってゆき、赤霧が天空からおりてきた」、「虚にあらす実にもあらず、またきえたりひかたりしている」などがそれだ。江淹はそうした奇異な光景に触発されて、「傳説が星にまたがり、夏の啓が両龍のつて天空をまう」という場面も想像したりしている。

こうした虹の出現や想像場面は、たしかに大仰かつ神秘的なものだといってよい。ただ、だからといって、すべてが虚構というわけではなく、おそらく彼が九石山で実見した虹、それへの感動がもとになって、こうした怪異な叙述となったのだろう。

ところが、にはいると、なぜか話題が現実の世界をはなれ、古伝説や遊仙のほうにうつっている。この話題転換、いささか唐突な感がある、なぜこうなるのかと、ふしぎな思いがしないでもない。

これは、はじめの「わが人生はゆきづまり、時世もうつろいがちなのがなし」の発言がヒントになる。江淹、

呉興に左遷されていたこの時期、心中に右のような厭世観が つよまってきた。そこで古伝説中の安期生や黄帝をまねて、遊仙を志向するようになっていたのではないか。そして九石山で偶然、赤虹を目にしたとき、その絢爛かつ神秘的な様態を介して、「やはり絢爛かつ神秘的なはずの」神仙や仙境のほうへ、連想がいつきに飛躍していったのだろう。

さてこの「赤虹賦」、右のような不意の話題転換もあって、読解が困難だったためだろう、日中とも、これまでほとんど専論がかかれてきていない。そもそも内容理解が困難なのだから、論文がかかれなかったのも、とうぜんのことだとせねばならない。そうしたなか、現在にいたるまで唯一の業績というべきものが、松浦史子「江淹 五色の筆 新考 山海経・郭璞の系譜から」(「中国詩文論叢」第二一集 二〇〇二)のち『漢魏六朝における山海経の受容とその展開』汲古書院 二〇一二年に収録)である。

この松浦氏の御論は、この難解な賦をきちんと読解し(たぶん日中初訳だったろう)。拙訳でも、おおいに参考にさせていただいた)、そのうえで「赤虹賦」の特徴や意義を、明快にのべられている。すなわち同氏は、この賦は『山海経』や

その郭璞注(そこにひかれる古伝説)のつよい影響下でかかれ、また自身の博物学的嗜好にも依拠したものだと言摘された。そして、神仙や仙境の典故や「『山海経』やその郭璞注に由来する」古伝説関連の語彙を多用し、さらに多様な色彩語をまじえつつ、「五色の筆」ふつの世界を展開させたものだ、とのべられたのである。

この松浦氏の御論は、難解な「赤虹賦」に正面から立ちむかい、精細に分析されたものである。私はその魅力的な分析(とくに江淹と『山海経』・郭璞注との相関)に感心し、「なるほど、そうだったのか」とおおいに啓発され、また刺激されたのだった。かくして俄然、「赤虹賦」への関心がわきおこり、氏とはすこしちがった見地から、この賦を論じてみたいとおもいつたのである。

私見によれば、松浦氏の御論は、いわば作品のそばまでグッと接近し、その特徴を精細に分析されたものである。ただ接近しすぎると、みえなくなってしまうものもあるかもしれない。とすれば、あえて作品から距離をとり、遠望してみるというやりかたも、あってよいだろう。本稿では、遠方からながめた「赤虹賦」像について、私の気づいたことをのべてみ

たいとおもう。

まず、『山海経』や仙境への関心についてかんがえてみよう。松浦氏はこの「赤虹賦」を、『山海経』「と郭璞注にひかれる古伝説」や仙境に関連つけて説明されていた。それはなにより、この賦中にその種の典故や語彙が、多用されていたからだろう。そして、において、江淹が神仙の足跡をたどってゆくことにふれながら、

思うに、江淹にとつて『山海経』世界のイメージが、より鮮明に繰り上げられるのは、奇怪な鉱物や本草、あるいは「虹」のような「奇」なる自然の天象を目の当たりにしたときなのである。南国呉興の山奥のそらを染め上げる「赤虹」の色彩協奏曲もまた、その顕著な例であるう。

とのべられている（右の同書一〇四頁）。

江淹が『山海経』世界のイメージに関心をもっていたのは、うたがいよのない事実だろう。ただそれが表現されるのは、氏も指摘されるように、鉱物や虹などの「奇」なる自然や天象を目の当たりにしたとき、という限定つきなのである。逆にいえば、それ以外のときは、関心をもたなかった、あるいは

はよりすくなくしか、もたなかったのだ。

じつさい、江淹の生涯全体をみわたしてみると、そうした『山海経』や仙境への関心は、かならずしも常時みられるものではない。詩文でいえば、氏が同書でとりあげる「丹沙可学賦」や「遂古篇」など、一部の作に限定された傾向であり、要するに一時的な関心だったといふべきだろう。

私は、この「一時的な関心」ということに、注目したい。というのは、この種の一時的な関心は、江淹にはほかにみられるからである。たとえば、劉景素によって呉興へ左遷させられた時期、彼は『楚辞』「やその周辺の世界」に熱中した。この『楚辞』への関心は、じつにふかく、また広範なものであり、おそらく質量とも『山海経』以上のものだったう。

そうした『楚辞』関心の典例として、「去故郷賦」があげられる。この賦は拙稿「江淹評伝」でもふれたが、あらためてとりあげてみよう。

元徽二年（四七四）、三十一歳の江淹は、劉景素から呉興令への転任を命じられた。事実上の左遷であり、また追放でもあった。やむなく江淹は同年秋、呉興の地へ出立したが、

その旅途でこの「去故郷賦」をつくつたのである。

右のごとき事情のためか、この賦には、後悔と失意の情があふれている。そして彼は、自分を屈原に擬し、呉興転任を屈原の楚国追放になぞらえて、つぎのような字句をつづつたのだつた。

こうしたなか、私は故郷がみえぬことをかなしみ、郷里が彼方になつたのをいたむばかり。川の中洲をこえてから冠をぬぎ、激浦にいたつてから外套もすてしまつた。蘆のさみしげなざわめきを耳にし、霜露がおりていることに気づいた。水辺にむかつて憂いを感じ、海浜で歳末もちかいと感慨にふける。旅途で書物をとつてもたのしいとおもえず、樽酒があつても、盃をもつ気にもならぬ。旅亭をでると客人をさけられるし、蘆辺をあゝくとひとりになれる。わが思ひは纏綿としてやむことなく、旅愁はふかく高潮するばかり。趙の琴を弾いても涙がでてき、燕の筋をふいても悲しみがあふれてくるのだ。

於是 泣故関之已尽、  
傷故国之無際。

出汀洲而解冠、  
入激浦而捐袂。

聽蒹葭之蕭瑟、  
知霜露之流滯。  
撫尺書而無悅、  
倚樽酒而不持。  
情嬋娟而未罷、  
愁爛漫而方滋。

对江皋而自憂、  
弔海浜而傷歲。  
去室宇而遠客、  
遵蘆葦以為期。  
切趙瑟以橫涕、  
吟燕筋而坐悲。

はじめに「私は故郷がみえぬことをかなしみ」云々というが、これ以降の叙述はあたかも、南方湿地帯に追放された屈原が、故国の楚をしたう場面を、そのまま賦中に移植したかのようである。その移植のしかたは、「自分」屈原、京口（故郷）＝楚、呉興＝南方湿地帯」ということだろう。

つづいて、「川の中洲をこえてから冠をぬぎ、激浦にいたつてから外套もすてしまった」（原文は「出汀洲而解冠」↓「入激浦而捐袂」という。ここで「激浦」という地名がでてくるが、これはそもそも、江淹がめざす呉興の地ではなく、「楚辞」にでてくる楚地方の地名なのだ。さらに、この「外套をすてる」の動作や「蕭瑟」「江皋」「嬋娟」などの語も、じつは「楚辞」中のそれをつかっているのである。

この部分の「楚辞」からきた典故をしめせば、「汀洲」（川



の中洲)は、『楚辞』九歌湘夫人の「汀洲の杜若を攀りて、將に以て遠き者に遺らんとす」を利用したものだ。さらに「激浦」(湖南省をながれる河川)は、『楚辞』九章涉江の「激浦に入りて余は儻個し、迷いて吾の如く所を知らず」をつかい、また「捐袂」(外套をすてる)は、『楚辞』九歌湘夫人の「余が袂を江中に捐て、余が襟を醴浦に遺つ」の字句を、自分の賦中に編入させたものである。ほかにも同種の『楚辞』由来の典故があるが、これはもう省略にしたがう。

このようにこの「去故郷賦」は、一篇全体が、『楚辞』の世界を模しながら叙されている。旅途の江淹は、この賦を叙したとき、失意のあまり、自分を屈原のごとくおもいこみ、すつぽりと『楚辞』の世界にはいりこんでしまっていたのだろ。いかにも恨人(多情多恨な性格)の彼らしい、心の動きかただといつてよい。こうした心の動きを、松浦氏の言説に模して解説したならば、

おもつに、江淹にとつて『楚辞』世界のイメージが、より鮮明にくりひろげられるのは、左遷や苦難というつらい目にあい、懷才不遇の無念をかみしめる、そのときなのである。南方湿地帯をゆくがごとく呉興へむかう彼の

脳裏には、悲劇的な屈原協奏曲が、延々となりひびいていたのだろう。

となろうか。

### 三 熱中と模擬

江淹の生涯、そして彼がのこした詩文をみれば、一時的に特定の書物や作品に熱中し、それを模した、あるいは影響をうけた詩文をつくるのは、この「赤虹賦」や「去故郷賦」にかぎらず、もう常態だといつてよい。

たとえば、モデルを標題に明示した作としては、「字梁孝兔園賦」(枚乘梁王兔園賦)、「效阮公詩」(阮籍詠懷詩)、「学魏文帝」(曹丕雜詩)、「劉僕射東山集学騷」(楚辞山鬼)、「山中楚辞」(楚辞各篇)などがある。さらに、標題にしめさぬとも、以前から模擬關係が指摘されてきた作として、「詣建平王上書」(鄒陽獄中上書自明)、「遂古篇」(楚辞天問)、「与交友論隱書」(嵇康与山巨源絶交書)、「燈賦」(宋玉風賦)、「麗色賦」(楚辞招魂)、「水上神女賦」(曹植洛神賦)などがある。部分的な、あるいは、ややあいま

いな模擬関係（特定の作から典故や語彙を多用するなど）まであげれば、もうきりがない。<sup>2</sup>「赤虹賦」と『山海経』・郭璞注との相関は、しいていえば、この「あいまいな模擬関係」に該当するのだろうか。

こうした江淹の模擬には、彼なりの方針やルールのようなものがあつたのだろうか。

江淹の模擬作を概観してみると、モデルとなつた作は、楚辞関係が若干おおいとはいへ、基本的に多様な詩文が混在しており、その選択に特段の傾向があるようにはみえない。また、模擬の手法（主題をまねる、構成をまねる、表現をまねる、典故を多用する等）もさまざまであり、これといったルールはうかがえない。おおざっぱにみた範囲では、ときどきの関心に応じて、あるときは甲詩、あるときは乙賦、あるときは主題、あるときは構成というふうに、気ままに模していったようにみえる。

では、まったくの無方針だつたのかというと、そうでもないさぞうだ。都合がよいことに、彼には自己の模擬好きをかたうた文章があり、それをよむと彼の模擬への考えかたがうかがえる。それは、彼の代表作のひとつ「雑体詩」に附した序文

である。

この「雑体詩」なるものは、無名氏もふくめ、三十人の詩人をえらび、その模した詩三十篇を時代順に列挙した、連作の模擬詩である。過去の詩人三十人に敬意を表しつつ、各人の特徴をすくいあげ、いかにもそのひとらしい模擬詩をつくつてならべたものだ。彼はこの「雑体詩」の序で、自分がなぜ模擬詩をつくるのかについて、

ところで五言詩の発生は、それほどふるくはないが、前漢と魏代では詩風がことなっているし、西晋と東晋以後でも、さうとう傾向がちがつている。これら各代の詩は作風や傾向の相違があり、また辞藻や音律の違いもあるが、私は、それぞれに美をそなえ、善を有しているとかんがえる。

いま私は、三十篇の詩をつくつて、歴代の詩風を模倣してみた。これら三十篇の模擬詩は、歴代の詩の変容ぶりをただしく品評したものではないが、まったくの見当ちがいでもあるまいとおもっている。

とのべている。各代の詩はそれぞれ詩風がことなるが、「それぞれに美をそなえ、善を有している」。だからその詩風を

模倣してみた——という。

これによって、江淹の模倣方針がわかる。すなわち「各代の詩は、それぞれに美をそなえ、善を有している。だから自分はそれを模倣するぞ」、これが彼の方針だったのである。

そうした模倣詩に対し、彼は「まったくの見当ちがいでもあるまいとおもっている」といい、なかなかの自負をもっていたようだ。じっさい、この「雑体詩」は「文選」にも採録されたわけだから、当時の人びとも、彼の模倣手腕には一目おいていたのだろう。このように江淹は、特定の時代や文風などにこだわることなく、「美をそなえ、善を有している」とおもえば、ああいいなと感興をおぼえ、さつと卓抜な模倣作がつくれるひとだったのである。

では、「江淹のいう美や善とはなにか」が問題になってくるが、ここでは、その問題は追究せず、おいておく。要するに、「雑体詩」で模した三十篇が、彼のいう美と善を具現した詩だったのだろう。

そして本稿にとって重要なのは、そうした美と善を具現したもののひとつが、『山海経』であり、郭璞注だったということである。江淹には、それが「美をそなえ、善を有してい

る」とみえたからこそ、同書の典故や語彙を多用して、「赤虹賦」をつくったのだった。

かくみてくると、「赤虹賦」や「去故郷賦」の創作は、彼にとっては、特別なことではなかったとせねばならない。要するに、そのときその場で、『山海経』や『楚辞』の世界が彼の心にフィットし、「美」や「善」を感じ、感興をおぼえた、というだけのことだったのだ。とすれば、彼が「赤虹賦」や「去故郷賦」をつくったのも、多々ある模倣的創作のワン・オブ・ゼムにすぎなかったとせねばなるまい。わかいころの江淹は、このように「美をそなえ、善を有している」名篇をわたりあるきながら、それに模した詩文をつくりつづけたのである。

ただこつした、わたりあるきながらの模倣創作は、江淹の関心が長続きしなかったことを、暗示するものでもある。特定の時代や文風にこだわらないのだから、関心もつづりかわってゆかざるをえない。じっさい、彼の創作を通観すると、特定の時代や文風にずっと関心をもって、模倣作をつくりつづけることは、生涯をとおしてなかった。あの熱烈だった『山海経』や『楚辞』への関心でさえ、彼の生涯全体からみ

ると、一時期のものにすぎなかったのである（後述）。江淹は幅ひろい関心をもち、いろんな詩文に「美」を感じるのだが、いずれも長続きせずにおわってしまったのだった。

かくみてくると、彼は生涯、「一時的な」模擬ふう創作に終始し、二番煎じのやすっぽい詩文をかいただけ、とおもわれるかもしれない。そして彼の「赤虹賦」も、その種のやすっぽい模擬作にすぎぬ、とおもわれるかもしれない。

だが、事實はそうではない。江淹がいきた六朝期では、模擬は二番煎じどころか、価値ある創作行為だとかんがえられていた。たとえば『文選』にも、「雜擬」という項がたてられ、江淹「雜体詩」をはじめ、陸機と陶淵明の「擬古詩」、謝靈運の「擬魏太子鄴中集詩」など、おおくの模擬作が採録されている。このように当時、模擬は価値ある創造行為だったのであり、彼はそうしたなかで、突出した名手だったのである。

じっさい彼は、一時的な関心や感興によつた模擬的創作ではあつても、卓抜な名篇をかくことができた。彼の模擬作は、原作の本質をたくみにすくいとつて、真贋をわかちがたいよつな域にせまっていたらしい。たとえば鍾嶸「詩品」中品で

は、彼の模擬手法をとりあげ、

江淹の詩風は多様な傾向があるが、とくに模擬にすぐれている。

文通詩体総雜、善於摸擬。

と評している。

また趙宋の嚴羽も、彼の『滄浪詩話』詩評において、江淹の模擬の手腕をたかく評価して、

古詩に擬した詩では、江淹こそが卓越した腕前をもっている。彼が淵明の詩に擬すれば、淵明詩そっくりにつくれるし、康樂の詩に擬すれば康樂詩にそっくりにつくれる。また左思の詩に擬すれば左思詩そっくりにつくれるし、郭璞の詩に擬すれば郭璞詩にそっくりにつくれるのである。

擬古、惟江文通最長。擬淵明似淵明、擬康樂似康樂。

擬左思似左思、擬郭璞似郭璞。

と評している。淵明に擬したら淵明にそっくり、靈運に模したら靈運にそっくりの詩がかけたのだという。おそらく江淹の模擬は、表面的な物まねに終始せず、対象の精神や本質まですくいとる、神似の域まで達していたのだらう。こつした

ところが、凡百の文人とはちがうところだったといつてよい。

#### 四 感情語の多用

遠方からながめた「赤虹賦」像として、もうひとつ、色彩語の多用についてもふれてみよう。

江淹の「赤虹賦」には、色彩語、つまり色をあらわす語がおおい。たとえば、松浦氏も指摘される箇所だが、赤虹が出現する場面（一）をしめすと、

そうこうしているうちに、紫雲が天空にのぼってゆき、赤霧が天空からおりてきた。「雨がふっており」白日はかくれて、碧雲が天のなかばまで渦まいている。やがてなごりの雨もまれとなり、陽光があでやかにかがやきだした。川の流れば金色の波浪かのように、岩石は玉の岸辺にそっくりだ。

於是  
 紫、油、上河、  
 絳、氛、下漢、  
 白、日、無余、  
 碧、雲、卷半、  
 残雨、蕭索、  
 水、学、金、波、  
 光、煙、艷、爛、  
 石、似、瓊、岸、

とある。この部分における色彩語をあげれば、「紫油」「絳氛」「白日」「碧雲」などは色彩を明示するものであるし、また「光煙」「艷爛」「金波」なども、間接的に色彩を暗示しているといつてよい。

松浦氏によると、こうした色彩語は、奇なる仙境「やそのむこうにある『山海経』世界」を叙する場面で、とくに多用されているという。私は明確な統計はもっていないが、たしかに、氏のご指摘は肯綮にあたっていそつだ。もう一例、「赤虹賦」以外にも例をあげてみれば、「丹沙可学賦」のつぎのような場面もそうだろう。

左方には昆吾の炎暑がひろがり、右方には崦嵫の卿雲がただよう。仙境の七色の輝きは絢爛とし、五色の雲気もただよっている。こんな光景は、世の人びとはみたくともないだろうし、鬼神も耳にしたことがないはずだ。「仙境に到着してみると」高低さまざまな碧台が、暗がりにたっているかとおもえば、すみきった金宮が、煌々とかがやいている。刺繍をほどこした小門では、蓮花が幻惑するかのようであり、錦でできた垣根では、蒲萄が見えかくれるかのようだ。赤光が稲妻のようにパツと

ひかり、翠霧がただよいつつ上空にのぼってゆく。

左昆吾之炎景	爛七采之昭耀	非世俗之習見
右崦嵫之卿雲	漫五色之爛燿	焉鬼神之嘗聞
既而	暖碧、台之錯落	幻蓮花於繡闥
輦翠氛而香冥	耀金宮之瓏玲	化蒲萄於錦屏
	純丹光而電燧	

この部分は、ひとが修行をへて遠遊し、仙境へ到着した場面である。そのためだろう、「七采」「五色」「碧台」「金宮」「丹光」「翠氛」など、いかにも仙境らしい鮮麗な色彩にあふれている。さらに「炎景」「卿雲」なども、色彩を暗示するものである。つまり江淹には、仙境という特定の場面、特定(色彩)の語彙を多用する傾向がある(ただし、これも一時的である。後述)といつてよからう。

しかし、これは色彩語だけのことであろうか。特定の場面に、特定の語彙を多用する傾向は、これにかぎらず、他にもあるのではないか。このことを説明するためには、すこし「赤虹賦」からはなれて、江淹の詩文全体をながめてみる必要があるう。

すると、さきに「一一 一時的な関心」でみた、「去故郷賦」の引用部分に注目してみよう。そこでは、「楚辞」の世界を移植していたが、語彙(ことばの出典ではない)に注目すると、色彩語ならぬ感情語が多用されていることに気づく。泣傷、自憂、傷歳、無悅、情嬋娟、愁爛漫、横涕、坐悲など。引用した八聯のなかに、これだけの感情語が(しかも悲観的なそれが)、つかわれているのである。この作は、京口から呉興へおちてゆく途上で叙したものだ。するとこれも、特定の場面(左遷)で、特定方面(感情)の語彙を多用したものと、いってよいだろう。

もうひとつ、べつの例をあげよう。それは秋冷をあらわす語の利用である。秋といった場合、宋玉の「九弁」の「悲しやかな、秋の気たるや。蕭瑟として、草木揺落して変衰す」云々がすぐ想起される。この「九弁」が出現して以後、詩文では「秋」「悲秋」(秋の気配にものごなしさを感じる)のイメージがよくなり、文人たちに襲用されてきたのだった。江淹も、この秋の季節感がたいへんすきだったよ<sup>(3)</sup>である。ところが、江淹の詩文で「秋」の用例を調査してみると、ただの「悲秋」でなく、もつと具体的に、不遇の日々を叙する

ときに、秋冷語を多用しているのに気づく。

たとえば、つぎの諸例をみてみよう。いずれも、呉興左遷時の作からとってきたものである。

「麗色賦」太陽が西の星宿へむかつて秋となり、弦月が夜空の軌道にうかぶころ、月光は門戸をてらし、玉露が空をおおうほどおりてきます。蜘蛛の糸が牆壁にかかり、螢が梁のあいだをめぐっています。……こうしたなか麗人は、雜珮をささげし殿方を想起しては、ずっとおもいつづけ、またともにすごした錦衾に心をいたため、たいへんかなしむのです。

至乃西陸始秋、白道月弦、

金波炤戸、  
玉露曖天、  
網絲掛牆、  
彩螢繞樑。

……憶雜珮兮且一念、

憐錦衾兮以九傷。

「四時賦」秋、涼風がふきだすと、白露がまるい玉をむすぶ。明月は川波に詠じ、螢火が寒さをむかえようとすするなか、庭中の梧楸（息子）の樹をながめたり、また織機のうえの細絹（妻）に思いをはせたりするのだ。

及夫秋風一至、白露团团。

明月生波、  
螢火迎寒、  
眷庭中之梧楸、  
念機上之羅絹。

「待罪江南思北歸賦」私は春に家族とわかれ、仲秋に呉興めざして出立しました。途中、わが馬は涼冷な葭の叢にくるしみ、農夫たちも霧や露にあえいでいます。私は金色の峰々と緑なす山々をこえ、桂樹ならば河川や碧の急流をわたりました。雲は清冷にして糸のようになびき、風は蕭条としてつねにふきよせます。猿は日光のもとで悲しげにさげび、黒猿はさむざむとした月下で声をあげています。

当青春而離散、  
方仲秋而遂徂、  
跨金峰与翠巒、  
涉桂水与碧湍、  
寒蒹葭於余馬、  
傷霧露於農夫、  
雲清冷而多緒、  
風蕭條而無端、  
猿之吟兮日光回、  
狄之啼兮月色寒。

傍点を付した語が、秋や秋冷に関する語である。「麗色賦」で秋にかなしむ麗人は、江淹そのひとの喩だと解せられるし、「四時賦」で秋の涼風のなか、梧楸（息子）の樹をながめたり、細絹（妻）に思いをはせたりするのも、江淹そのひとだろ。さらに「待罪江南思北歸賦」で呉興めざして旅してい

るのも、江淹以外にはありえないはずだ。つまり、これらはいずれも秋冷語を多用して、自己の不遇（左遷）の日々を叙しているのである。

以上、感情語や秋冷語をとりあげてみた。このように江淹文学全体からみれば、特定の場面に、特定方面の語彙を多用することは、特段めずらしいことではない（また他の文人も、しばしばやっていることだ）。ほかに、女性語、山水語、漢賦語、洛神語などの視点からみてゆけば、また同種の発見があることだろう。

江淹はしばしば、一時的に、あるときは甲、あるときは乙というふうになり、さまざまな現象や事物、あるいは書物に関心をもち、熱中した。すると文才にめぐまれた彼は、ただ心中であこがれるだけでなく、当該の現象（事物、書物）へのつよい思いを、「それに関連した」語彙を多用して、さっと名篇にしたのであつたのである。それゆえ、当時の人びとがこうした特定語彙の過剰をみれば、「ああ、熱しやすくさめやすい江淹の、いつものアレがはじまったな」と苦笑したかもしれない。

## 五 初心わすれず

以上、遠方から「赤虹賦」の行文をながめ、気づいたことを指摘してきた。これによって江淹は、「赤虹賦」の場合にかぎらず、「一時的に」特定の書物や現象に熱中して、いろんな模擬作をかいたり、特定語彙を多用したりしていたことがわかった。江淹のこうした創作のしかたは、いかに理解し、いかに評価すべきだろうか。

私見によれば、こうした創作は、江淹がそのときその場の「真実」を、そのまま詩文に叙した、ということだろう。そして、それが真実の思いであればこそ、ひとの心をうち、現在までのこつたのだとおもう。彼の「赤虹賦」や「去故郷賦」が、一時的な関心や一過性の熱中による成果だったことは、まちがいない。しかしだからといって、真実でなく、にせの思いを叙した作にすぎぬ、とおとしめてはならないのである。たとえば、江淹が「去故郷賦」で「楚辞」や屈原を模したのとは、「呉興はいや、京口にかえりたい」という「真実」の思いがあつたからである。そうしたいが、生来の恨人ふう



性格を全開させ、『楚辞』ふうの悲劇的な色調にしたてたのだった。おなじく「麗色賦」で、秋冷語を多用してかなしむ麗人を叙したのは、自分は才（麗色）をいだいでいるのに、不当にも不遇な目にあっているという思いがあつたからだろう。そうした懐才不遇の念が、彼のうつつたえを「真実」なものにさせ、人びとの琴線にふれたのである。

では、「赤虹賦」の場合はどうだったのだろうか。私なりに「赤虹賦」の創作状況を推測したならば、つぎのようなことではなかつたか。

この呉興左遷の時期、江淹は一時的に道家思想にかぶれ、隠逸や遊仙をこころざすようになった。さらに彼は「松浦氏によれば」以前から、博物学的嗜好も有していた。そうした下地があつたところへ、彼はたまたま、九石山で赤虹の出現に遭遇した。そして、その出没するさまにたいへん感動した。鮮明な赤虹のとつげんの出現と消滅。彼はその後、『山海経』「の郭璞注にある古伝説」の世界をすかしみた。そこで赤虹を鮮明な色彩で神秘的に叙して、『山海経』や古伝説のむこうにある「はずの、やはり神秘的な」神仙や仙境をえがこうとした――。

私見によれば、そうした心の動きが、そのときその場の、江淹の「真実」だったのだろう。けつして、心にもない絵空事をつつつて、世の人びとを煙にまこうとしたわけではなかつたはずだ。

しかし、こうした特定の現象や事物への熱中は、一時的なものである以上、やがて時間がたつと、憑き物があちるかのごとく、霧消してしまいやすい。じつさい、そのとおりになった。呉興に左遷されて四年目の元徽四年、彼の主君だった劉景素が敗亡するや、江淹は同年かその翌年に建康へかえることができた。すると、繁華な都会にかえるやいなや、『山海経』や仙境への関心は、たちまち衰微してしまつたのである。かわりに江淹の脳裏をしめたものは、「古伝説や仙境などでなく、世俗の」立身、そして政界進出への意欲であつた。彼は建康にかえるや、劉景素の仇討ちを企図することもなく、さつと次代の権力者たる蕭道成（景素を殺害した朝廷軍の部将でもあつた）につかえた。そして道成が宋をほろぼし、齊朝を樹立するや、道成のために詔勅を執筆し、またつづく諸帝のしたでも高位に名をつらねたのだった。

こつした転向、これは、江淹があきつぽかつたとか権力に

迎合したとかでなく、むしろ初心をわすれなかった、ということだろう。

そうである。江淹には、仙境への志向などは別次元の、よりおおきな初心があった。それは、「立身したい」という願望である。これは一時的なものではない。彼の生涯を通じて、ずっと希求してやまぬ願望であつた。彼が呉興左遷に苦悩したのも、それが初心（＝立身）と真逆のものだつたからである。

だからこそ、健康にかへつた彼は、屈原ふう悲劇や遊仙志向などはいっさいすてさり、積極的に蕭道成にちかづいたのだつた。そして彼の信任をえて表奏や詔勅を代作し、齊の高官につらなつた。すると、こんどは詩賦の創作までも、すてさつたのである（江郎尽才）。立身すれば、もはや詩賦の創作などは御用済みだつたからだろう。かくして、江淹は「文人たる自己をすて」齊の赫赫たる廷臣に、あざやかに変身したのだつた。

そつした江淹の処世をみたうえで、あらためて「赤虹賦」をよみなおしてみると、興味ぶかい記述があることに気づく。すなわち、のなかに、

なげいたとて気分はくつろがない、せめて日々の憂いはらしたいとおもふ。／現世には神仙がいなくなったので、ここの山中でその足跡をみつきたいもの。彼らは高峰で仙草をとつたり、崩石の間から神丹をみつつけようとしたり、しているのだろうか。

とある。これをよむと、九石山にでかけた当初の動機は、赤虹をみるためでも、神仙をさがすためでもなかつた。彼はただ、「日々の憂いはらしたい」とおもつたから、九石山にでかけたのである。

では、江淹はなぜ「日々の憂いはらしたい」とおもつたのか。それは、もちろん呉興での日々がたのしくなかつたからだろう。強烈な立身願望をもつた江淹であれば、左遷地の日々がたのしいはずがない。彼の本音は「健康にかへつて立身したい」であり、それができないので、しかたなく山野を探索して、「日々の憂いはら」そつとしていたのである。

とすれば、右（赤虹賦）の「現世には神仙がいなくなったので、ここの山中でその足跡をみつつけようとした行動は、いわばそつした「日々の憂い」への代償行為だつたというべきだろう。つまり江淹は、真に神仙をもとめていたわけでは

なかった。ましてや、赤虹をさがし、その賦をつくるために、山行したのでもなかった。ただ、左遷の憂さをはらしたかったのである。

呉興で、彼は後悔していた。やれやれ、京口ではへまをやったなあ。おかげで、こんな辺地に追放されてしまった。ああ、いやだ、ああ、なさけない——こうツツツいいながら、憂さをはらすべく、山野をさまよっていたのだらう。そうしたなかで偶然、彼は赤虹に遭遇し「そして賦をつくっ」たのだった。こうみてくるとこの「赤虹賦」、表面上は、虹への関心や仙境への憧憬をかたるように見えるが、その底には、建康にかえって立身したいという「意識・無意識の」願いが存していた、というべきだろう。

じっさい、寒門生まれの江淹にとつて、おのが立身をはかることは、少年時からの念願であった。「南史」本伝につきのような話がある。

江淹は「五十六歳のとき齊の」秘書監、侍中、衛尉卿と累遷した。彼は十三歳だったとき、父が死んで貧窮となったので、いつも山で薪とりをして母をやしなっていた。あるとき薪とりにでかけたところ、高価な貂蟬の冠

をみつけた。江淹はそれをつつて、母の生活費にあてようとした。

すると母はいった。「これは、おまえにとつて吉兆ですよ。おまえの才能は、この貂蟬のようにすばらしいのです。どうして、いつまでも貧困であるはずがありません。手もとにおいておき、おまえが侍中、に立身したときに、この冠をかぶりなさい」。

「五十六歳のとき」侍中になれたことよつて、母が予言したとおりになったのだった。

この話、いかにも小説ふうのエピソードだが、彼の立身願望をかたつたものとして、なかなか興味ぶかい。話中の「貂蟬の冠」なるものは、江淹が将来手にいれる高位（具体的には侍中）を暗示しているのだらう。十三歳のとき、江淹母子がねがった「侍中」への立身、それが五十六歳のときに、みごとにはたせられたのである。そのとき江淹は、亡き母との会話をおもいかえして、感慨にふけたことだろう。

このように江淹は、「山で薪とりをして母をやしな」うような貧窮の出であった。そうした彼がめざしたものは、仙境にゆくことでもなく、屈原のような愛国者になることでもな

く、ましてや赤虹を実見することでもなかった。立身すること、彼はただそれだけをめざして、生涯努力しつづけたのである。

彼が詩文の創作にはげんだのも、べつに文学の道に精進しようとしたわけではない。詩文がつくれると、立身に好都合だったからである。だから、立身をめざしているときは、懸命に詩文をつくって、おのが有能さをアピールしようとした。だが、彼は蕭道成につかえて以後は、順調に立身の道をあゆんでゆけるようになった。そうなれば、もはや詩文などはつくる必要も必然性も、なくなってしまうたのだった（拙稿「江淹評伝」参照）。

それに関して、江淹に「江郎才尽」とよばれる有名なエピソードがのこっている。江淹がわかくして詩文の才をたたえられながら、晩年にその才がおとろえたという話である。著名な話なので引用は略すが、その話では、ある夜の夢で、懐中にあつた一匹錦（「五色筆」とする資料もある）をひとにあたえたので、詩文の才がうしなわれたことになっている。

ところが、このエピソード、江淹がその夢をみたのは、彼が宣城太守をやめたとき、すなわち永元元年（四九九、江淹

五十六歳）だという設定なのである。江淹はその年にこそ、侍中に昇進したのだった。この一致は、おそらく偶然だとしよよいだろうが、彼が立身（侍中への昇進）をとって、文学（一匹錦や五色筆）の道を放棄したことの象徴として、まことにふさわしいといつてよからう。

## 注

(1) 江淹「赤虹賦」への注釈は以下のとおり。訳注をつくるにあたっては、本文であげた俞・張「校注」、羅・李「新訳」、丁・楊「校注」等を参照した。また創作年の推定は、丁福林『江淹年賦』九十二頁によった。  
東南——江淹が左遷された建安郡呉興が、中国の東南部にあるので、こうかいたのだらう。

九石之山——呉興の浦城県の西南四十里に九石潭という地名があり、そこにある山をさすのだらう。

巫咸採葉、群帝上下者——巫咸とは古伝説上の人物。帝堯の医師だったともいふ。山海經「海外西経に「巫咸の国は女丑の北に在り。右手に青蛇を操り、左手に赤蛇を操る。登葆山に在り、群巫の従いて上下する所なり」とあり、郭璞注に「葉を採らんとして往来す」とある。松浦史子氏（本文参照）は、巫咸が採葉をおこなうとするのは、この郭璞注にはじまるといふ。

斂意——意を斂める。ここでは、九石山にのぼる気がなくなる、の意だろう。

肅齡——小舟をととのえる、の意か。

雄虹赫赫——虹があざやかに出現した。『楚辞』遠遊に「雄虹の采旆を建てて、五色雜りて炫耀す」とあるのをふまえたものか。

偃蹇山頂、鳥奕江湄——「偃蹇」は屈曲、「鳥奕」はつづくさま。『江淹集校注』はこの二句は、虹が山頂と江湄の間に横ざまに、跨がったさまを叙したものだといふ。

寒雨日陰陽之氣——虹は、雨と日による陰陽の気が作用したものだ、ということ。江淹は、虹が天空につかぶ虫だといふ俗説は、信じていなかったようだ。

憶昔登爐峰上——江淹は泰始六年（四七〇）、二十七歳のとき、湘州刺史となった劉景素に随行して、湘州に旅だった。

その途上で、廬山の香爐峯にのぼって、「從冠軍建平王登廬山香爐峯詩」をつくった。その五年まえのことを想起しているのだろう。

太極——天地未分のころにあったという万物の根源のこと。ここでは原始のまま、ということが。

菌蓋——生気や活力がさかんなさま。『風賦』。

悵何意之容与兮——「悵むも何ぞ意の容与ならんや」と解し、なげいたとて気分はくつろがない、と訳しておいた。

鼉梁——鼉の橋。『竹書紀年』卷下に「周穆王が越を伐とうとし」東のかた九江に至るや、鼉鼉を叱して以て梁を為らし

む」とある。

紫油上河——下句の「絳氣」（赤霧）と対応するので、ここでは紫雲の意だろう。「河」は銀河、下句の「漢」もおなじ。卷半——雲が天のなかばまで渦まいて「雨をふらす」、と解した。

想番禺之広野、意丹山之喬峰——「想」「意」とあるので、ここからは江淹の空想だろう。神秘的な赤虹の出没をみているうちに、江淹の空想がはばいたいたのだろう。「番禺」「丹山」はともに『山海経』にでてくる地名。

騎傳説之一星、乘夏后之兩龍——「傳説」「夏后」は古伝説にあらわれる英雄の名。上句については、『莊子』大宗師に「傳説は」東維に乗り箕尾に騎り、列星に比ぶ」とあり、下句については、『山海経』海外西経に「大楽の野、夏后啓は此に於いて九代を舞い、兩龍に乗る」とある。

彼靈物其詎幾、象火滅於山紅——「靈物」は赤虹をいふ。「彼の靈物は其れ詎幾ならんや、火滅するも山紅なるに象れり」と解した。

赤鳥之易遺——神仙の安期生の故事をふまえる。『列仙伝』につきのようにある。「秦始皇東遊するや、「安期生は」見ゆるを請う。「秦始皇は」与に語ること三日三夜、金璧数千万を賜う。「安期生は」出でて、阜郷亭に皆な置きて去る。書を留め、赤の玉鳥一双を以て報いと為せり。「書に」曰く、後数年して我を蓬萊山に求めよ」と。

鼎湖之可慕——「鼎湖」は地名。『史記』封禪書によると、黄

帝がこの地で龍にのって、登仙したという。

朱鬢四靄之駕——「朱鬢」は神馬で、『山海經』海内北經にみえる。「白靄」も乗り物らしい。いずれも神仙だけがのれるのだらう。

方瞳「角之人——「方瞳」「一角」、ともに神仙の名。

帝台北荒之際——「帝台は北荒の際にあり」と解した。

弇山西海之浜——「弇山は西海の浜にあり」と解した。

- (2) こうした古典を模擬して自分の詩文をつくる手法は、「詣建平王上書」執筆時にはじまったようにおもわれる。拙稿「江淹評伝」を参照。

- (3) 高橋和巳氏は論文「江淹の文学」(『作品集9 中国文学論集』河出書房新社 一九七二)において、江淹の詩文では、おおく「季節においては秋、時においては黄昏が好んで歌われ」ていることを指摘された。そして、「晩秋の夕暮れへの注視は、鮮明なる物に感じて動く痛烈なる情の尊重であるとともに、また上昇よりは下降しようとする感情の偏愛でもある」とのべられている(四〇一〜四〇二頁)。

(中京大学文学部教授)